
『星の瞬く夜に泡沫花火の光』

稲木 グラフィアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『星の瞬く夜に泡沫花火の光』

【Nコード】

N4365Z

【作者名】

稲木 グラフィアス

【あらすじ】

星亮高等学校の少年少女達五人の高校生活を描いた物語。

思いつきで書いているので面白いか分かりませんが、読んでくれたら幸いです。

はじめにと言ってはなんですが

このお話は、せいりょうこうとうがっこう星亮高等学校の五人の少年少女達の高校生活を描いたストーリーです。

『キャラクター』

・柴航しばわたる

星高二年B組。

主人公。

運動は得意。

勉強の方は決して良くはない。

・佐野さのアルベリク

星高二年B組。

ヲタク。

運動は航と同じ位得意だが、勉強はまるで駄目。

明るい性格で五人のムードメーカー。

フランスと日本のハーフ。

・瀬ノ内せのうち貴子たかこ

星高二年B組。

学級委員。

運動は得意ではないが、よい点は取っている。勉強はトップクラ

スのよくいる優秀つ子。

・須藤すどう真香まなか

星高二年A組。

クラスで一番の美少女。

須藤不動産の第二子。

温厚で、天然な性格。

・曾我 義人

星高二年A組。

イケメン。

本気でやっているのか分からない事が多く、突っ込み所満載な奴。

校内でもよく一緒にいるため、五人引っ括めて『さ行の五人』と呼ばれている。

五人の頭文字からとったようだ。

第一話『真夏の夜に夜空のスケッチ』

「暇だなあ」

学校が夏休みに入ってから少し経った昼、太陽がギンギンと照っている。

「あっつ」

「こつも暑くては宿題をやる気にもならない。」

「？」

唐突に俺のケータイが鳴る。
見ると佐野アルベリクさのからだった。

「アルか　もしもし？」

『よっ、航。今何してる？』

「絶賛、暇」

『課題は？』

「こんな暑い中でやる気にならねえよ」

こんな暑い中でも宿題をやる気になるアルは尊敬に値する。

『ならば、俺達と一緒に終わらさね？』

「は？」

俺達、と言ったか？

『今さ、貴子たかこん家いんだよ。俺と貴子と真香まなかと義人よしともいるぜ』

「だったら俺も呼べよ」

俺だけ仲間外れになるじゃねーか。

『今から始める所だから、ダッシュで来いよ？』

「分かった、すぐ行く」

そう言っつて俺はケータイを切る。

夏休みの宿題を一纏めにし、急いで家を出る。

貴子の家は走ればすぐに着く。

「っし、到着っつと」

俺はインターホンを押す。

すると、貴子のお母さんが出てくる。

「あ、柴君じゃない」

「こんにちは、おばさん」

貴子のお母さんは「みんなは貴子の部屋にいるわ」と言ったので俺は階段を上がって二階に行く。
そして、貴子の部屋の前に来る。

「よっ。来たぜ」

部屋に入るとひとつのテーブルを四人で囲んでいた。
しかも、クーラー効いてる中で。

「お、来た来た」

「早いわね」

「お先に始めてます」

「暑い中ごくろうさんだね」

順にアル、貴子、真香、義人が返事する。

「今、何の教科やってるんだ？」

俺は四人の輪に入ると課題の問題集を取り出そうとする。

「今は数？」

俺は鞆から数学？の問題集を出す。
確か、正弦定理だったか？

「えっと、何々？」

『問1 ABCの外接円をRとし、 $a \parallel 6$ 、 $A \parallel 45^\circ$ 、 $\angle C$
 $\parallel 60^\circ$ であるとき、 c とRを求めよ。』

「」

駄目だ、全然分かんねえ。

図もさっぱり分かんない。

「貴子」

「ん、何？」

俺の呼び掛けに応じてくれる瀬ノ内。

普段は冷たい奴だが、

「全く分かんない」

「例題は分かる？ 公式を見なさい。ほら」

瀬ノ内は物を教える時は凄く優しいんだよな。

瀬ノ内は皆の質問に対して丁寧に答えてくれる。

この分だとかかなり早い段階で終わりそうだ。

「なあ」

「うん？」

課題を三分の二程終わらした所でアルが話し出す。

「課題、もう少しで終わりそうじゃん？ 課題が終わったら何する？」

それを考えるのは課題が終わってからでいいと思うのだが。アルがこのような事を言うのは大抵は飽きた時だ。

「後少しなんだからもう少し頑張りましょうよ」

須藤は日本史の課題を進めている。

「それにしても、課題って多いよね」

アルはうんざりしたように言う。

ま、それは同感する。

「学校に行かない分の勉強よ」

「だからってさ、夏の間真ん中を外も出ずに課題をやって過ごすって勿体無くない？」

学校が決めた事なんだから俺らがどうこう出来るものでもないんだがな。

「よし、皆で海に行こう！」

『海？』

「行くこうにも課題を終わらせないと行けないよ」

うん、義人の言う通りだ。

「おし、じゃあ、さっさと終わらせようぜ！」

アル、乗せられたな。

その後、アルは目の色を変えて課題に取り組んだ。
答えはかなり間違っていたようだが。

そして、四日後の夕方。

「つしやああああ！！ 終わったー！！！」

「まだ、星の観察が残ってるでしょ？ ま、夜にならないと出来な
いけど」

星の観察は確か、夏の大三角形のスケッチだっけ？

夏だけと夜に外に出ると寒いんだよな。

「なら、今日の夜に済ませようぜ？ そして、明日は祭りに行く
こう」

「あゝ、祭りか。明日だったっけ」

毎年神社でやっては、皆で行ってたな。
って、この間は七夕祭りがあったんだよな。
雨だったけど。

「今年も皆で行くだろ？」

「はい、今年も皆で行きましょう」

須藤はニツコリと笑っている。
今日もその笑顔は眩しいです。

「僕も行くよ。毎年の事だから」

義人もOKの様だ。

「ま、誰か欠ける事はないでしょ」

「そうだな」

全員の予定が合い、明日は祭りに行く事となった。

「じゃあ今日、8時頃に神社のあそこで集合しようか」

「はい、星がよく見えるじゃん」

そして、その日の夜。

神社の裏を通り、さらにその奥に歩いていくと、そこには林が開けて空がよく見えるようになっていた。

今日の夜空は晴れていて星がよく見える。
今日観察しに来て良かったと思う。

「じゃ、早速始めましょ」

『おー！』

俺達は、それぞれのスケッチをし始めた。
でも、晴れているとは言っても、星って細かくて描きにくいだよ。
そんな事を思いながら、ペンを動かす。

「ふう」

「航、描けたのか？」

アルが話し掛けてくる。

「ああ、まあな。でも腕が疲れた」

ついでに言うと首もだが。

「アルはどうした？」

「俺か？俺は勿論描けたぜ」

アルはスケッチを見せて本当だということを証明する。

「あー、花火とか持ってくれば良かったな」

「花火なら明日の祭りで上げるだろ？」

「やっぱ、手持ち花火がいいじゃん？」

二人して地面に寝転ぶ。

ちよつと冷たいけど、夏の暑い夜にはちょうど良い。
すると、貴子が歩いてきた。

「二人共描けたの？」

「描けた」

「僕も描けたよ」

「終わりました」

義人と真香も来て、皆で座り込んだ。

「あ、皆さんは今夜の流星群って見ますか？」

真香が唐突に言い出した。

「流星群？」

「はい、ペルセウス座流星群だそうです。夜半から明け方まで観察ができるそうですよ？」

流星群か。

そつえば見たことないな。

小学生頃だっただろうか。
皆で見ようとしたら、皆して寝てしまったのを覚えている。

「良かったら私の家で見ませんか？」

「えっ！ いいのっ!？」

アルが即座に反応。

「はい、構いませんよ」

「じゃあ、私も行こうかしら」

その後、義人も行くということ、俺も行くことにした。

ん？ 明け方までって事は泊まりに行くってことか？

「皆で泊まりなんていつ以来かしら」

「小学生頃ではないでしょうか？」

「確か、皆して寝ちゃったんだよね」

真香の家、俺達は五人でベランダに出ていた。

真香の家はとても広く、小学生頃に流星群を見に行った時この家に泊まりに来ていた。

「ふふふ、女の子の家でお泊まりとはな」

横で何か笑っているアル。

「お前はどんなフラグを想像しているんだ？」

「一つ屋根の下ですよ？」

「そんな事したらこの家から摘まみ出されるよ？」

「よしっ！ 今から筋トレして強くなるっ！」

義人が言うとアルは腹筋を始めた。

「いち、に、さんっ」

「今からじゃ間に合わないだろ」

「そうだよ。相手は今もアルのようによこしまな行為に及んだ者をシメるために筋トレをしてるんだから」

「義人、それ以上言うと武器を持ち出しそうだから止める」

「そうか、その手があった！」

「止めんかっ！」

義人はアルを犯罪者にするつもりなのだろうか。

「でも、アルが武器を持っててもあんまり強くなさそうだよね」

「なにをお。怒った俺に殺されちゃうよ？ とか言う位に怖いぞ？」
鉈を持った某竜宮さんになるのでやめてくれませんかね。

「じゃあ、僕は金属つバット持って対抗しようか？」

「よし、じゃあ義人が負けたらメイド服を着てご奉仕してもらおうかな？」

「えゝ、アルってそっちの趣味があったの？」

「ここまで来て冷めないでよ！」

露骨に嫌そうな顔をした義人にアルが叫ぶ。

「航ゝ、アルがホモに目覚めた」

「目覚めてない！！！」

「え？ アル、モテないからって義人に手を出しちゃ駄目よ」

騒いでた俺らに貴子が話しに介入。

「だから、目覚めてないって！ ってか、モテないって言うな！」

「大丈夫だよアル、世の中にはゲイバーなるものがあるらしいから」

「うわあああああああ！！！」

とつとつアルが泣き出した。
弄り過ぎだ。

「大丈夫ですよ、アル君。分かっていますから」

「真香様はやざじいですね　　ぐず」

「まず、涙と鼻水を止める」

ポケットティッシュを渡すとアルはそれで鼻をかむ。

「ズピ　　まあ、それは置いておいてだ。諸君」

鼻をかみ終わると、すぐに立ち直る。

こういうスイッチの切り替えは早いな。

「流れ星に向かって願いを三回唱えると、その願いが叶う。というのを聞いたことがあるだろうか？」

「流れ星にお願いですか。ロマンチックですね」

「だが、流れ星はすぐに流れてしまうから願いを咄嗟に言えない事が多い。そこで願いを唱える練習をしたいと思う」

まあ、聞いたことがあるけど、小さい頃だよな。
高校生にもなってそんな事を言い出すとはな。

「流れ星がどれ位の速さで流れるか分かってんのかよ」

「だから練習するんだろ？　ほら、　　出逢いがほしい出逢いが

「出逢いがほしい出逢いがほしい出逢いがほしいー!!」

「出逢いがほしいです出逢いがほしいです出逢いがほしいですー!!」

「目指すは生徒会長目指すは生徒会長目指すは生徒会長ー!!」

「健康でいられますように健康でいられますように健康でいられますようにー」

皆で思い思いの願いを練習する。
やべっ、置いてかれてる？

「あー、えっと、俺はー」

「ほら、航も練習しましょ？」

「航の願いはなんだい？」

ちよつと待つてくれ。
迷ってる訳じゃない。
かといって、無い訳でもないんだが

「あっ！ 見えましたよっ！」

「何っ！ よーし、出逢いがほしい出逢いがほしい出逢いがほしいー!!」

「出逢いがほしいです出逢いがほしいです出逢いがほしいですー!!」

「目指すは生徒会長目指すは生徒会長目指すは生徒会長ー！！」

「健康でいられますように健康でいられますように健康でいられますようにー」

あー、思いつかねえ。

こういう時、アルみたいにガキっぱい事が思い付くといいんだな。

「出逢いがほしい出逢いがほしい出逢いがほしいー！！」

「出逢いがほしいです出逢いがほしいです出逢いがほしいですー！！」

「目指すは生徒会長目指すは生徒会長目指すは生徒会長ー！！」

「健康でいられますように健康でいられますように健康でいられますようにー」

何回言ってもりなのだろうか、こいつらは。

呆れる俺だが、俺達は幼い頃から一緒にいた。

振り返って思うなら、楽しかった。

「
なら、俺の願いはこれでいいかな。」

「
いつまでも、楽しい仲でいられますように」

「
おい、航っ！ 願いは三回言わなきゃいけないんだぞっ！」

「こんな願い長くて間に合わねえよー!」

流れ星一つ一つは儚く消えて行くけど。

俺達の仲はいつまでも続きますように。

第一話『真夏の夜に夜空のスケッチ』（後書き）

次回予告『真夏の夜に神社の夏祭り』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4365z/>

『星の瞬く夜に泡沫花火の光』

2011年12月15日00時46分発行